

軽度知的障害を有する生徒集団におけるICTを活用した生徒指導の試み
 ～ 情報モラルといじめ問題を生徒集団に主体的に取り組みさせることを目指して ～

宮城県立支援学校岩沼高等学園
 情報教育部 教諭 小山 淳
 生徒指導部 教諭 菅原 宏行

I 本校生徒の実態

本校は開校14年目の高等部単独の支援学校である。本校に通う生徒は軽度の知的障害を有する生徒だが、中には汎性発達障害や自閉症を併せ持つ生徒もいる。本校の特色である1年生全員に課す寄宿舎での生活（2・3年生は自宅からの通学）や年2回の職場実習、さらには毎日の放課後の部活動、大小様々な行事など、これらの学園生活の中で多くの生徒は自分の障害に由来する課題を克服しよう、あるいは教師が提示した課題に本気で取り組もうとする、素直で真面目な気質を持っている。卒業後の進路状況は、障害者雇用枠を利用した企業・事業所への就労がほとんどで、福祉的就労や宮城障害者職業能力開発校への進学も毎年数名程度いる。このようなことから本校では生徒の卒業後の社会生活をよりよいものにするための学習に力を入れている。

一方、生徒指導の側面から、平成23、24、25年度の過去3年間に生じた大小様々な問題行動の状況を整理すると以下のようになる。

	トラブルの内容	案件数	割合
1	友人間 (暴力、いじめにつながる言動、金品やりとり)	52件	43%
2	性的 (異性間あるいは同性間の不適切な関わり)	26件	22%
3	携帯電話など (メール・通話の迷惑行為、不適切な画像やりとり)	11件	9%
4	その他 (器物破損、飛び出し、喫煙、他校生とのトラブルなど)	30件	26%
	合計	119件	100%

このデータから上位の3つの案件が全体の74パーセントを占めていることが分かる。さらに友人間や性的なトラブルに携帯電話でのやりとりが深く介在している場合が非常に多いことも分かった。この背景として、本校生徒は小中学校時代に比較的小集団で生活してきたが、本校入学とともに人間関係が急激に広がること、そして本校入学と同時に携帯電話の利用が始まることなどが挙げられる。さらに人間関係の変化について細かく見ると以下のようになる。

時期	人間関係の様子
① 入学直後	学校、寄宿舎での生活をきっかけに、急激な人間関係の広がりや密接さから、自分と他者の間の摩擦を感じるようになる。(ここまで密接に同級生と関わるといふ経験がない場合が多い。)
② 入学～1年夏休み前後	ある程度友人関係がうまく成立するようになり、コミュニケーションが増す。携帯でのやりとりが増え、それとともにトラブルも発生しやすくなる。
③ 休み後～1年終わり	人付き合いに自信を感じるようになるとともに、異性へと興味が移っていく。男女間のトラブルが発生しやすくなる。

これらのことを踏まえると、本校の生徒指導で重要なことは第1に「友人との関わり方」、「異性との関わり方」、「携帯電話などの扱い方」の3つの学習を1年生の段階でしっかりと行うこと、第2に2、3年生ではそれらを定着させるためのトレーニングの繰り返しや再確認を行うことであると考えられる。

II 主題設定の理由

近年、中高生の間で携帯端末に関連したトラブルが増加している。この携帯端末の使い方の特徴的なのは従来までの通話やメールではなく、LINE、Twitter、Facebookに代表されるSNS（Social Networking Service）が情報モラルに反した利用をしているケースが多いという事である。情報モラルとは、情報化社会で適正に活動するための基となる考え方や態度である。さらに情報モラル教育とは、現在の情報化社会において負の要素を理解した上で、よりよいコミュニケーションや人と人との関係づくりのために、今後も変化を続けていく情報手段をいかに上手に使いこなしていくか、そのための判断力や心構えを身に付けさせる教育であると考えられる。

特別支援学校である本校も例外ではなく携帯端末に関連した問題が発生している。知的障害や発達障害を有する生徒は、他者がどのような表現や行動を不快に感じるのか、相手の言葉の裏にどのような意図があるのかといった心情の予測が不得手である場合が多い。また自他のプライバシーに対する意識も薄い傾向がある。そのため被害を受けやすいだ

けでなく、本人が気付かないままに周囲に問題を生じさせることもある。携帯電話に関するアンケートによると本校1年生の携帯端末の所持率は78.7%、そのうちスマートフォンの所持率は62.2%にもなる。スマートフォンの普及により、今までになかったスマートフォン特有のトラブル、つまりLINEなどによる不適切な書き込み・誹謗中傷が本校でも起きており、それがいじめへと発展する可能性は否定できない。

こうした実情をふまえ、インターネットや携帯端末、特にスマートフォンを利用するための適切な態度とスキルを身につけることや、相手の快・不快に配慮した言葉の表現を学ぶことなど、情報モラルの観点から生徒のメディアリテラシーを高める指導について研究を深め、いじめの予防を図ることが急務である。

本研究ではIにあげた3つの問題行動を未然に防ぐための学習として、①「携帯電話などの扱い方」つまり情報モラルの学習、そして②「友人との関わり方」つまりいじめを予防する学習にICTの活用が大いに有効ではないかと考えた。ここで問題になっている携帯電話やスマートフォンはそれ自体がICTである。講義形式の授業よりも、実際にスマートフォンなどのICT機器を活用し、積極的に授業に取り入れることで生徒の興味や関心を最大限に引き出し、現在SNSを利用している生徒にも、そうでない生徒にも分かりやすい授業が実現し、集団の力で有意義な学習ができるのではないかと考えた。またいじめに関する学習では、いじめの雰囲気、いじめにつながる表現、お互いの気持ちなどを集団で考えさせ共感を抱かせることができる授業を計画した時、生徒たちの持つ視覚優位の特性を踏まえテレビモニターや電子黒板などの視覚に訴えるICT機器が力を発揮できるのではないかと考え、本主題を設定した。

III 実践的研究の目標

- 1 ICTを活用した指導により、スマートフォンなどを利用する際の情報モラルの向上を図る。
- 2 ICTを活用した指導により、いじめのない、よりよい集団の形成を図る。

IV 実践的研究の計画

期間	内容
H26 3月	実態把握（過去3年間の生活指導の状況についてデータ収集と分析） 実践的研究の計画立案
H26 4月～5月	主題の設定、指導内容及び授業計画の検討
H26 6月	授業実践Ⅰ「携帯電話の正しい使い方を知ろう」
H26 7月	授業実践Ⅱ「友人との関わり方～いじめについて考える～」
H26 7月～8月	実践的研究の検証
H26 8月～9月	実践的研究のまとめ

V 2つの授業実践例について

1 授業実践Ⅰ「携帯電話の正しい使い方を知ろう」について

(1) 指導の方針

- ・ 新入生として本校での生活について気を付けるべきことを学べるようにする。
- ・ 携帯電話などの適切なマナーを学び、問題となるような使用を未然に防ぐことができるようにする。
- ・ 対面で接する時と同じように、携帯電話などの使用時も、相手の気持ちを考えた適切なコミュニケーションが必要であることが分かるようにする。
- ・ 不適切な行為の具体例をもとに、全員で考えられるようにする。

(2) 指導の内容

前半の場面1では携帯電話とスマートフォンの違い(スマートフォンはほとんどコンピューターであること)や、携帯電話やスマートフォンを利用する際の注意点を学ぶ。

後半の場面2では生徒の目の前でリアルタイムのLINE上のやり取りを教員がやって見せ、それをもとに不適切な発言について考えさせる。

最後に各クラス単位で振り返りを行い、学んだ内容の確認と定着を図る。

(3) 学習の形態

学年集会形式(教師14名、生徒47名)

(4) 指導の形態

教科名「特別活動」 単元名「携帯電話の正しい使い方を知ろう」

(5) 指導時間

平成26年6月3日(火) 1, 2校時

(6) 使用機器

Windows8のタブレットパソコン、プレゼンソフト(PowerPoint)、iPhone2台、スマートフォン1台、大型テレビモニター、無線機器、既存の無線ネットワーク

(7) この授業を行うことで期待できること

すでに LINE 上での発言を巡って生徒間のトラブルがある。これを抑制したり予防したりするためにはまずは正しい知識が必要である。スマートフォンはコンピューターと同様世界につながっており、キャリア内あるいはキャリア間通信の携帯電話とは別物で、使用の際には注意が必要ということが理解できる。また、不適切な LINE 上での発言を「集団」で見ること、客観的な見方が生まれ、過去の自分の LINE 上での発言が適切であったかどうかを振り返ることができる。つまり、それが不適切であるという認識が「集団の力」によって、全員で共有されることが大きく期待できる。

(8) ICTの活用ポイント

ポイント1 **場面1 (PowerPoint を見せる場面)**

PowerPoint を用いた授業は一般的に生徒に対して押し付け的になりがちである。それは、教師が事前に準備した画面を見せ説明することに終始してしまうからである。それを防ぎ、教師の発問に対する生徒の生き生きとした応答発言を最大に引き出すため、Windows8 のタブレットパソコンとペンを使用し、PowerPoint の画面に生徒の発言内容をその場で書き込んでテレビモニターで見せ、すぐに全生徒で共有できるようにする。そのために PowerPoint の画面には生徒の発言を書き込む余白を十分に取っておく。このことにより障害に由来する視覚優位の認知特性を持つ生徒にも授業の内容が浸透すると考えられる。

ポイント2 **場面2 (LINE の画面を見せる場面)**

T1 が自分の iPhone の LINE の画面をそのままテレビモニターで見せ、解説する。2人のT2がT1の発言に合わせて、その場で iPhone やスマートフォンを使用し LINE に投稿する。T1 は LINE 上の発言についてリアルタイムで解説する。発言はすべて事前に原稿を準備して行う。スマートフォンなどの画面は非常に小さいが、大型テレビモニターで拡大することで非常に見やすくなる。また生徒達もなじみのある LINE の画面であるため、より自分のこととして捉えることができる。

ポイント3 **場面1 と 2 に共通すること**

Windows8 のタブレットパソコン⇔大型テレビモニター、iPhone⇔大型テレビモニター の接続は無線で行った。無線で行うことにより教師が動ける範囲に制限がなくなり、ライブ感に溢れたメリハリのある授業を行うことができるようになる。

(9) 接続イメージ

場面1 (PowerPoint を見せる場面)

テレビ… (HDMI ケーブル) …ScreenBeam Display Receiver (WiDi 受信アダプター) … (無線) …Windows8 のタブレットパソコン

* Windows8 の WiDi という機能を使います。



場面2 (LINE の画面を見せる場面)

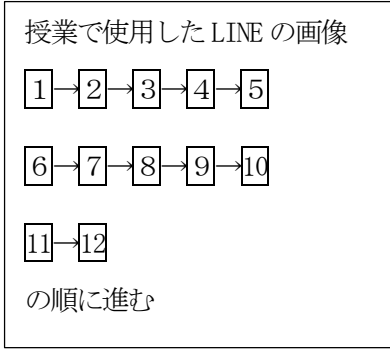
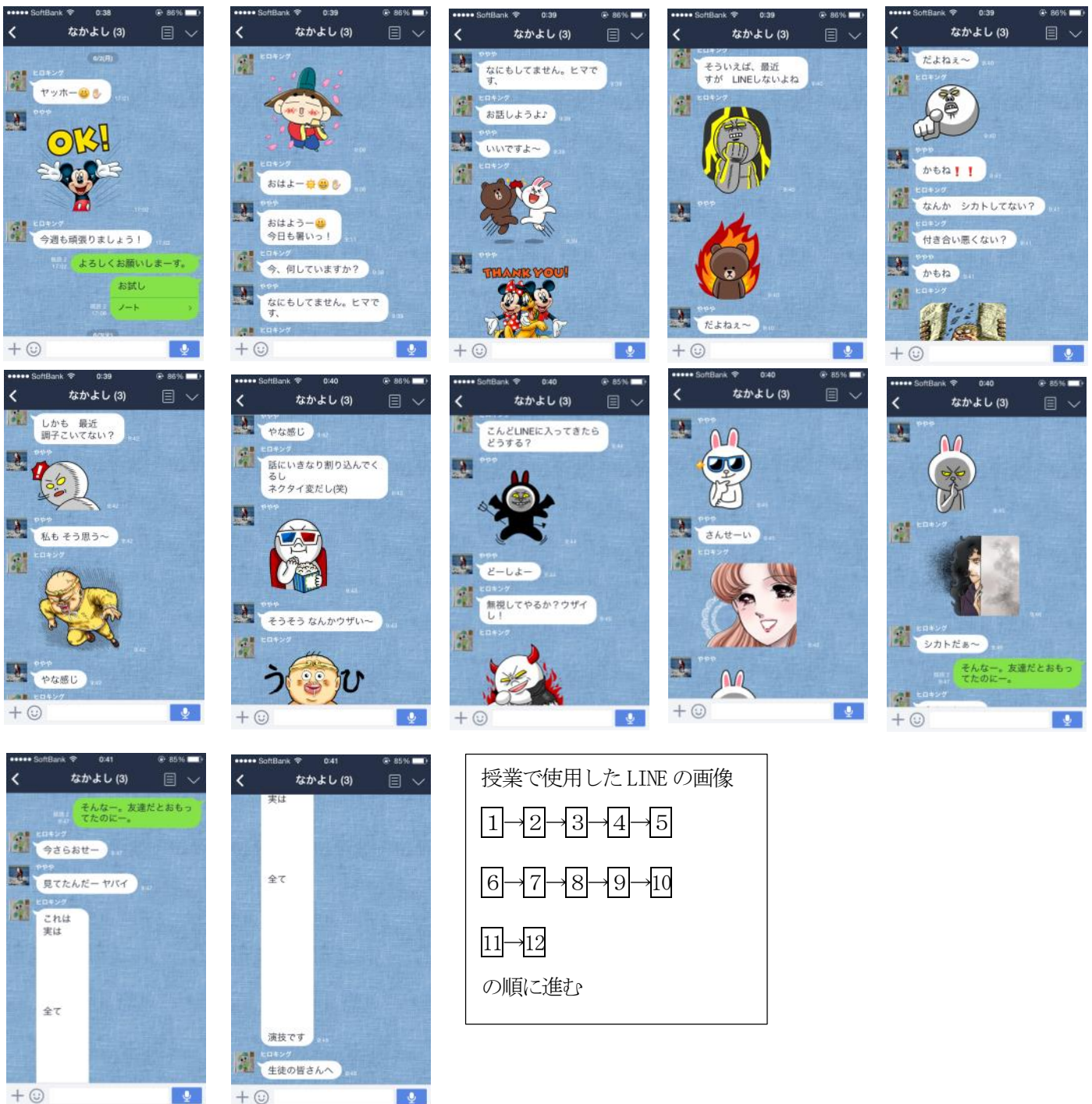
テレビ… (HDMI ケーブル) …AppleTV… (無線) …既存の無線 Lan ルーター… (無線) …iPhone

* iPhone の AirPlay という機能を使います。



(10) 主な活動内容

時間	主な学習活動	指導上の留意点
1校時	<p><1校時目 全体指導> 場所 多目的室 指導者 T1 主指導者 T2 副指導者 2名 T3 担任, 副担任 全員</p> <p><場面1></p> <p>1 入学後の9週間を振り返る。 ①新しい学校生活に慣れたか。 ②周囲が見えるようになり余裕が生まれるのはよいが、出過ぎた行動をしていないか。 ③自分がされて嫌なことは、他人にはしない。</p> <p>2 本時は「携帯電話の使用について」学習することを知る。 ①携帯電話などを所有している、いないに関わらず大切な学習であることを確認。 ②このことで先輩たちも悩み苦しんできた。 ③生徒の心得の携帯電話に関する部分の確認。 ④本日の学習の流れを知る。</p> <p>3 携帯電話とスマートフォンの違いについて ①携帯電話を使うことは、キャリア（au, ドコモ, ソフトバンクなど）内のネットワークでのやりとりであるということ。 ②スマートフォンを使うことは、www（ワールド ワイド ネットワーク）、つまり全世界に張り巡らされたネットワークでのやりとりであるということ。 ③①と②は全く意味が違うということ。</p> <p>4 LINE, ツイッター, フェイスブックの使用マナーについて ①個人情報とは？ ②危険な書き込み, 迷惑な書き込み, マナーの悪い書き込みとは？ ③LINEの画面を実際に見せながら, どのような書き込みがよいのか？悪いのか？を集団で考える。</p> <p><場面2></p> <p>※ T1, T2のLINE上でのやりとりを見る。</p> <p>5 LINEのグループについて ①普段の生活での仲間づきあい（グループ）を注意して行うように, LINE上でのグループでも注意が必要であることを気付かせる。 ②仲間とは何か？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・目の前のことも大切だが、時々過去を振り返り、自分を褒めたり、反省したりすることの大切さに気付かせる。 ・仲間に対する悪口、下に見た態度など、思い当たる節がないかどうか思い出させる。 ・来週、全校で「携帯電話安全教室」があり、その時に講師の方の話をより理解しやすくするための学習でもあることを意識させる。 ・専門的な言葉も登場するが、テレビのコマーシャルなどを思い出させ、理解しやすくする。 ・興味の度合いに差があることが予想されるが、「良いマナーを知る」＝「良い社会人に近づく」ことを意識させる。 ・LINEのグループを題材に、仲間づきあいをもう一度深く考えるきっかけとしたい。
2校時	<p><2校時目 クラス指導> 場所 各教室 指導者 各クラスの担任, 副担任</p> <p>1 プリント1（携帯電話などの利用に関するアンケート）記入。 ①現在の自分の状況を理解する。 ②携帯電話の利用で困ったことを、正直に先生に相談していいことを知る。</p> <p>2 プリント2（LINEをするときの注意点）を見ながら、1校時目の振り返りをする。</p> <p>3 まとめ 対面で接する時と同じように、携帯電話などの使用時も、仲間と適切なコミュニケーションをとることが大切であることを確認する。 「仲間を傷つけない。仲間を大切にする。」</p> <p>4 学習プリントを特活ファイルに入れる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートは必ず全員回収する。後日データ集計。 ・無記名で行うが、いつでも先生に相談していいことを強調する。またある程度の掌握をする。 ・生徒の興味関心や理解レベルに応じた説明をする。プリントすべてを取り上げる必要はなし。 ・今後、生徒の様子を見ながら個別に指導を行う。
準備物	生徒…生徒用椅子, 特活ファイル, 筆記用具	



(11) この授業での生徒の様子

指導教員同士による LINE 上のやりとりは臨場感があり、生徒は実際にその場で LINE に参加しているような雰囲気であった。LINE をしたことがない生徒も、これが LINE というものなのだと理解できたと思われる。T1 が表現の仕方について解説すると、生き生きとした生徒の応答が見られ、授業に入り込んでいる様子が窺えた。大型テレビモニターとスマートフォンの組み合わせは間違いなく生徒を授業に引き付けていた。

この授業では生徒がお互いの顔が見える状態で LINE のやり取りについて話し合いができるので、不適切な書き込みとは何であるかを客観的に気付くことができる。一人では気付くことが難しい問題が、集団の力によって適切な答えへと導かれているようだった。

2 授業実践 I 「友人との関わり方〜いじめについて考える〜」について

(1) 指導の方針

- ①いじめの定義を知る ②いじめのタイプを知る ③いじめの構造を知る ④いじめの心理を知る
- ⑤以上を踏まえて、いじめをなくす方法を集団で考える

(2) 指導の内容

- ①テレビモニターに Power Point を表示し、いじめについての解説を行う。生徒との対話形式を心がける。
- ②テレビモニターにいじめの構造図を表示し、電子黒板システムを活用することで、生徒が参加しやすくする。

(3) 学習の形態

学年集会形式（教師14名、生徒47名）

(4) 指導の形態

教科名「特別活動」 単元名「友人との関わり方～いじめについて考える～」

(5) 指導時間

平成26年7月4日（金）1，2校時

(6) 使用機器

PC2台、プレゼンソフト（PowerPoint）、大型テレビモニター、電子黒板機能付きプロジェクター、大型スクリーン

(7) この授業を行うことで期待できること

いじめはどの集団でも起こりうる深刻な問題であり、できることなら未然に防ぎたい。特にいじめの構造において、被害者・加害者だけではなく、観客・傍観者の存在が大きなポイントとなる。自分たちが無意識のうちに観客・傍観者となって、いじめに関わっているということを理解させるのは言葉での説明だけでは難しい。しかし電子黒板を利用していじめの構造図を投影し、被害者・加害者・観客・傍観者をペンツールソフトや電子ペンによる書き込み機能を使って生徒にマーキングさせる場面を設定することで、生徒を積極的に授業に参加させることができると考えられる。

(8) ICTの活用ポイント

ポイント1 PowerPointを使ったいじめの解説（これだけでは特に真新しいことはない）

ポイント2 電子黒板のペンツール、カーテン/スポットライト、キャプチャー保存などの機能を活用することで視覚に訴えることができるとともに、インタラクティブ（双方向）な授業が可能となる。

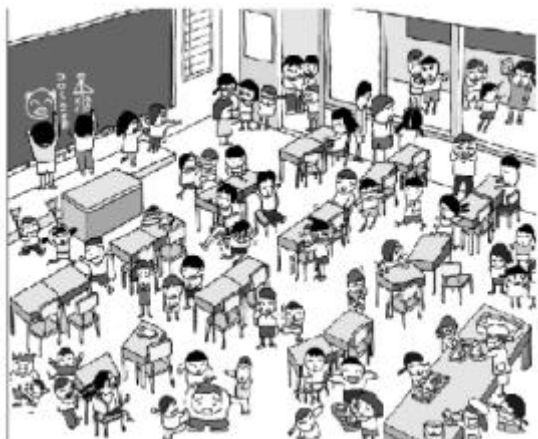
(9) 接続イメージ



図 8-4 電子黒板の活用イメージ

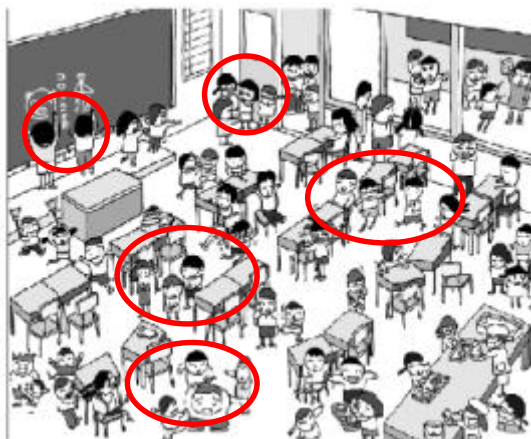
(10) 主な活動内容

時間	学習活動・内容	指導上の留意点
	指導者 T1 指導者 T2 担任, 副担任 全員 ※ クラスごとに横1列に並ぶ。 1組が1列目、6組が6列目に整列する。 ※ 学級委員が点呼をとる ※ テレビモニター・電子黒板プロジェクターを使用。授業中はモニターが見えるように、任意に散らばってもよい 1 いじめの定義 平成18年度、文科省による定義をわかりやすく解説 2 いじめの種類 学校関連で最も多い3つを説明 3 いじめの関係者 いじめの構造図をプロジェクターに投影。いじめの関係者の構造を解説 ※画像上で説明、生徒にも参加させる 4 いじめがもたらすもの いじめを行って得るものは何もないことを強調 5 心理的側面からのいじめの原因 6 いじめを起こさないためには 最終的に「互いの存在を認め、互いに高めあえる仲間作りが大切である」ことに気付かせるようにする。 7 終了後、学級に戻る 8 各クラスで感想を書き、振り返りをする。担任が回収。	<ul style="list-style-type: none"> ・ T1に注目 ・ 同じ生徒が挙手・発言することが予想される。なるべく多くの生徒に発言させることを心がける。 ・ 電子黒板の電子ペン・ペンツール機能を使う。 ・ 個人の内面の話になるので慎重に言葉を選ぶこと。 ・ T1に注目 ・ 号令はランダムに○組の日直にさせ、大勢の前での号令に慣れさせる。
準備物	生徒・筆記用具、クリップボード、生徒用椅子	



いじめの構造図

電子黒板機能付きプロジェクターを使って、生徒に「いじめ」と感じる場面・いじめの関係者にマーキングをさせる。



マーキング後

(11) この授業での生徒の様子

大型テレビモニターを用いた PowerPoint によるいじめの解説の場面において、生徒の興味関心を引き出せるかどうかは、どちらかという指導者の力量 (PP の構成や説明, 言葉・セリフ) に左右されがちである。しかし今回は ICT 活用, つまり電子黒板システムの利用によって生徒をしっかりと引き付けることができた。発問に対する答えや解説を, 電子ペンやペンツールによる書き込みで生徒にさせる場面を設けると, 日常と比べて格段に多くの挙手があり, 積極的に前に出てくる生徒が多かった。また, 普段積極的な発言が見られない生徒でさえも, 自分の考えをしっかりと伝えることができた。全体を通して生徒が電子黒板に集中して授業に参加していた。電子黒板システムは生徒の自分の考えを説明する力を伸ばすことができる, 有効なツールであると感じた。

VI 実践的研究の検証

今回, 2つの授業で ICT 機器を活用したが, 授業前に「この授業を行うことで期待できること」を明確にしてから行った。各授業の「この授業での生徒の様子」にある通り, 期待通りあるいはそれ以上の結果が得られたと言える。携帯などの使用の仕方といじめについての生徒の困り感あるいは「何とかしたい。」という気持ちを捉え, 今後の生活に役立てることができる指導ができたと考えられる。

VII まとめ

近年 ICT が注目を浴びている。本校に限らず ICT が学校現場に取り入れられる理由としては

- ①「授業」＝「プレゼン」という考え方 (世界的に TED というプレゼン大会が注目を集めている。)
- ②視覚的支援が非常に有効 (特に支援学校において)
- ③生徒同士の練り合いのためのツールとして有効
- ④既存の ICT 機器の有効利用

などが挙げられる。

しかし現実目を見ると, 「ICT の授業への活用＝設備の充実」のような安易な考え方に走りがちなのが実情である。大切なことは「生徒に何を伝えるべきか?」→「そのためにはどのような手段がより有効か?」→「そのためにはどのような教師のスキル, 教材, 設備が必要か?」ということである。本校は以下の表のように決して設備が整っているわけではないが, 限られた設備を有効利用しようとする努力, スキルを広めようとする努力を怠らない学校である。今後とも今回の 2つの実践例にとどまらず ICT を積極的に活用した授業を行いたいと考えている。また参考までに次ページに本校の教科情報の年間指導計画を示した。

VIII 最後に

学校は教育機関としての説明責任を有している。保護者や地域に対して, それを意識するだけでなく, 授業を受けている当事者である生徒にも今, 学習している内容が明確に伝わらなくてはならない。実際本校ではこの研究で示した 2つの実践例以外にも, 保護者に対して 4月から現在まで学年集会形式で様々な生活指導を行ってきたことを, 7月の 1学年懇談会で説明を行っている。学校がどのような指導を生徒に行っているかをしっかりと保護者に伝えることで, 保護者の理解と協力をいただくことが大切であることは言うまでもない。常に, 学校⇄保護者で二人三脚の体制で指導を行い, 生徒が主体性を持って学習を行うことが, 生徒の卒業後のよりよい社会生活につながると考えている。

参考資料1 本校の教科情報の年間指導計画

	1年	2年	3年
4月	○オリエンテーション ○実態把握 ●情報を学ぶ目的を知る。 ●生徒一人一人の実態を把握する。	○オリエンテーション ○復習 ●1学年で学習したことを振り返る。	○オリエンテーション ○復習 ●2学年で学習したことを振り返る。
5月	○パソコンの操作を知ろう ○ワープロソフトの基本的な使い方を学ぼう。 ●パソコンの起動・終了方法を知る。 ●マウスの基本的な使い方を知る。 ●キーボードの配列を知り、ひらがなを入力することができる。 ●変換の仕方を知り、漢字・カタカナ交じりの文章を打つことができる。 ●入力した文字の修正・削除の仕方を知る ●ファイルの保存の仕方、開き方を知る。	○表計算ソフトの基本的な使い方 ↓ ●セルについて知り、数字や文字を入力することができる。 ●入力した文字の修正・削除の仕方を知る。 ●ファイルの保存の仕方、開き方を知る。	○撮影用機器の使い方 ○画像処理ソフト ↓ ●ビデオ、デジタルカメラの使い方を知ることができる。 ●学校内を撮影し、鑑賞する ●画像処理ソフトを利用し、画像の加工や編集ができる。
職場実習			
6月	○タイピングの練習をしよう。 ●タッチタイピングの指使いを知り、慣れる。【もとめる】 ・ひらがな入力練習 ↓ ●漢字変換の練習 ●熟語変換の練習 ●よく使うことばの練習	・簡単な表の作成 ↓ ●表計算ソフトを利用し、手本と同じ表を作成することができる。	○情報モラルについて ↓ ●個人情報や著作権、メールの送受信等のマナーやルールを学ぶ。【はたす】
7月・8月	夏季休業日		
9月	※校内ワープロ検定 ・よく使う語句の練習 ・よく使うカタカナの練習 ・入力しづらいカタカナの練習	○校内ワープロ検定 ↓ ●校内ワープロ検定に向けて練習する。【もとめる】	○校内ワープロ検定 ↓ ●校内ワープロ検定に向けて練習する。
10月	・文節変換のしかた ・文節変換の練習	職場実習	
11月	○インターネットを安全に使う。 ●インターネットの安全な使い方と、利用時のルールとマナーを知る。【はたす】	○データ入力 ↓ ●データ入力練習ソフトを使い、指定されたデータを入力することができる。【もとめる】	○年賀状作成 ↓ ●年賀状作成ソフトを使い、年賀状を作成することができる。【かかわる】【もとめる】
12月	○年賀状を作ろう。 ●年賀状ソフトを使い、簡単な年賀状を作成することができる。【かかわる】【もとめる】	↓	↓
冬季休業日			
1月	・インターネットで検索をしよう。 ●インターネットの検索の仕方を学び、調べることができる。【かかわる】【もとめる】	○1年間のまとめ ・校内ワープロ検定 ↓ ●校内ワープロ検定に向けて練習する。	○1年間のまとめ ・校内ワープロ検定 ↓ ●PowerPoint を使用して、スライドショーを作成し発表会をする。 ●1年分のデータを確認し、必要な物をCD-Rに保存することができる。【もとめる】【はたす】
2月	○校内ワープロ検定 ●校内ワープロ検定に向けて練習する。	↓	○思い出発表表 ・まとめ
3月	○一年のまとめ ●今年度学んだ文書作成の復習	・まとめ ●1年分のデータを確認し、必要な物をCD-Rに保存することができる。	

参考資料2 本校のICT機器などの一覧

時期	機器名など	台数	設置・保管場所
平成12年から順次	教師, 生徒用PC	114台	職員室, パソコン室
	デジタルビデオカメラ	2台	職員室
	デジタルカメラ	4台	職員室
	プロジェクター+スクリーン (固定式)	2セット	多目的室, コモンホール
	プロジェクター+スクリーン (移動式)	1セット	職員室
	Word, Excel ベースによる「個別の支援計画, 指導要録など」の入力支援システム	ネットワークに各PCからアクセス可能	
平成23年	大型液晶テレビ	2台	会議室, 多目的室
	ブルーレイレコーダー	1台	会議室
	DVDレコーダー	1台	多目的室
	ネットワークの一部無線化		職員室, 会議室, 多目的室, コモンホール, 体育館
平成25年	Access, Excel ベースによる「個別の支援計画, 指導要録など」の新校務支援システム	ネットワークに各PCからアクセス可能	
	電子黒板機能付プロジェクター (移動式)+スクリーン	1セット	職員室
平成26年	校務支援システムのバージョンアップ	ネットワークに各PCからアクセス可能	
	ネットワークの無線化拡大の検討		各教室, 専門教科室

本校の生徒の実情を詳しく分析した結果、「携帯電話」「友人との関わり方」「異性との関わり方」についての学習が必要であるということが分かった。場当たりの指導ではなく、計画性、系統性を持たせた指導をしたいと考えた。生活指導に関する1年生の4月から8月の一連の学習の中で、特に「携帯電話」「友人との関わり方」の2つの学習をより深く生徒に浸透させるために、ICTを活用することが有効ではないかという仮説を立てた。さらに今回の実践的研究の目標を

1. ICTを活用した指導により、スマートフォンなどを利用する際の情報モラルの向上を図る。

2. ICTを活用した指導により、いじめのないよりよい集団の形成を図る。

と設定し、2つの授業でICTを活用した。

授業実践Ⅰ「携帯電話の正しい使い方を知ろう」では、教師のiPhoneの画面を無線でテレビモニターに写し、教師3人のLINE上でのやり取りを生徒に見せながら解説し、どのような表現が不適切なのかを生徒全員で考える授業を行った。集団で授業を行うことにより、他者の公平な意見を聞くことができ、自分のこれまでの言動を客観的に振り返ることができたと思われる。今後の携帯端末の利用の際の表現の仕方などで改善が期待できる。

授業実践Ⅱ「友人との関わり方」では、PowerPointをテレビモニター、いじめの図をプロジェクターで電子黒板に投影というように、2つの画面を利用し、いじめについて視覚的に分かりやすい授業として展開することを主眼に置き、その目的をほぼ達成することができた。さらに電子黒板は生徒を「積極的に授業に参加させることができる。」・「自分の考えを説明する力を伸ばすことができる。」という潜在的な能力が秘められたICT機器であることが分かった。

これらの2つの授業実践により、情報モラルの向上、いじめのない集団の形成の第1歩が踏み出すことができた実感できた。しかしこれはあくまで第1歩であり、1年生後半、2年生、3年生での継続的で系統的な指導が必要であると考えられる。今後もICTを活用した様々な授業を積極的に行っていく予定である。それと同時にこのような授業を行っていることを、説明責任を果たすという考え方を大切にしながら保護者にも伝えることで、保護者の理解と協力を得て、卒業後の生徒のよりよい社会生活を目指して指導を行っていききたい。